

【学会報告】

## Biology of Ageing Scientific Conference

杉本 昌隆

国立長寿医療研究センター

2015年10月22日から24日まで、シンガポールで老化の基礎分野を中心とした会議が開催されました。前日までタイでIAGGシンポジウムが開催されており、どちらに参加しようかと迷ったのですが、ベーシックサイエンスにフォーカスを当てたシンガポールでの会議に参加することにしました。シンガポールを訪れるのは私にとって今回が初めてで、覚悟していたよりも蒸し暑く、汗をかいても戸外では全く乾かなかったのには参ってしまいました。さらに滞在中はインドネシアからくるhazeの影響で視界が極めて悪いという状況でしたが、それでも町並みは非常に美しく、機会があればゆっくりと観光してみたいと思いました。

会議への参加者は200名程度と、比較的小さい規模で開催されましたが、老化基礎科学分野をリードする多くの研究者を海外から招待し、さらに開会式ではシンガポールの保健省大臣がスピーチを行うなど、老化研究に対してシンガポール当局が力を入れているのが良くわかりました。残念だったのは、シンガポール国外においてこの会議に関する周知が殆どされておらず、一般の参加者のほとんどがシンガポール在住の研究者であったことでした。私自身も、この会議については知人から聞いて偶然知ったので参加することができたのですが、せっかく大金をかけて多くの著名な研究者の講演を聞けるめったにない機会なのに勿体ないと思わざるを得ませんでした。

初日のセッションは夜に開始され、基調講演としてAlbert Einstein 大学 Aging Research Institute 所長の Nir Barzilai 博士が、百寿者に多く存在する miRNA と IGF シグナルとの関連について主に発表をされました(元々は Oxford 大学の Linda Partridge 博士が講演される予定でしたが急遽変更になりました)。

2日目以降は露骨に人が減って百名弱の参加者しかいませんでした。この日は、一般参加者の発表(口演、ポスター)を含め、応用研究よりのセッションが行われました。午後には特に介入研究に関する講演と発表が行われ、ここでは Washington 大学の Luigi Fontana 博士と Buck Institute for Aging Research の Judith Campisi 博士の招待講演が行われました。Campisi 博士は、SASP (senescence-associated secretory phenotype) を提唱した研究者であり、本講演では昨年末に Developmental Cell 誌で発表された老化細胞を排除可能なマウスから得られた研究成果について、未発表データを含めて発表されました。私の研究室でも全く同じコンセプトのマウスを作製していたので(現在投稿中)、彼女の仕事には特に注目していたのですが、中でも老化細胞を排除する事により癌転移が抑制されるという私たちも発見していた現象と全く同じことにも触れていた事に大変ショックを受けてしまいました。間の悪いことに、彼女の講演の直後に一般口演として私の発表があり、ショックのあまり元気のない発表をしてしまいました。彼女とは色々と話



(写真) Biology of Ageing organizing committee と招待講演者たち

をしたかったのですが、残念な事にこのセッションが終わったら会場から姿を消してしまい、最終日も会場には現れませんでした。

最終日（3日目）は細胞老化のセッションと老化と代謝制御に関するセッションが開かれました。細胞老化のセッションでの招待講演には Stanford 大学の Thomas Rando 博士が含まれていました。同博士は parabiosis モデルから得られた知見や、筋幹細胞の加齢に伴うエピジェネティックな変化に関する研究成果について、これまでに既に誌面で発表されたデータをもとに発表され

ました。夕方にはセッションは終了して Farewell パーティーが開催され、夜中の便で慌ただしく帰国しました。

以上、短い期間でしたが非常に濃密な会でした。この会議は今後も開催され、2年後には欧州での開催を計画していると伺いました。シンガポールという日本からも近い場所だったので参加しましたが、日本から欧州まで行ってこの会議に参加する価値があるかは疑問です。できればアジア地区で継続してこのような会を開催し、日本からも積極的に関与することを希望します。